

第5回公文書管理の在り方等に関する有識者会議（5/15）
における上川公文書管理担当大臣発言のポイント

- 今回 19 省庁の文書管理の実態を視察したが、同じフレームワークの下でやっているにもかかわらず、実態には相当差があることが分かった。まず、一番良い事例（ベストプラクティス）に近づけていくことが大事。
- 仕事しやすい環境を作り、仕事の効率を上げるためにも、文書管理の一連のプロセスをより一層良いものにしていくことが重要。
- どう文書を扱うかは、各課の仕事の内容によって相当差がある。そこをきめ細かく見ていく必要がある。
- 総括文書管理者の下、チームを作って改善に取り組む省庁もあるなど、現在、前向きな取組も見られる。これらと連携しながら、あるべき姿を描いていくには、今が絶好のタイミング。
- 「文書とは何なのか」ということを作成段階から考える意識を末端まで徹底することが必要であり、研修によってスキルアップしていかないといけない。また、保存・廃棄の判断に専門家の目が入ることが必要であり、アーキビストの役割は重要。
- 「外部からの目」が大事であり、ある意味で、今回の視察が監査的な役割を果たしたと思っている。そうしたことをどう制度として取り入れていくか、が今後の議論の大きなテーマの一つ。
- 「あるべき姿」を見定め、これに近付けていくことが大事。膨大な役所の文書を最新のものから過去に逆上がりに見直しながら、いっぺんにやるより丁寧に積み上げて、生きていくシステムにしていくことが重要。